

Costume and Textile

No.25

服飾文化学会会報

2013年3月

2013（平成25）年度 第14回服飾文化学会大会のお知らせ

会員の皆様に既にお送りしましたお知らせのように、2013（平成25）年度 第14回総会・大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様にご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

開催日 2013年5月25日（土）・26日（日）

開催校 東京家政大学

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

【研究発表】16号館1階B講義室

【展示】16号館1階中体育室

【見学会】東京家政大学博物館企画展

1. プログラム

5月25日（土）

13：30～15：30 研究発表

15：40～17：10 特別講演

演題 「ファッションジュエリーの世界
—おしゃれの舞台裏—」

講師 大角幸枝氏（東京家政大学名誉教授）

17：20～17：50 総会（16号館1階講義室）

本学会の発展のために、多数の会員の総会への参加をお願いいたします。本大会プログラムに「総会の委任状ハガキ」を同封いたします。

18：00～20：30 懇親会（「ルーチェ」構内）

5月26日（日）

9：30～11：30 研究発表

11：30～12：30 作品・ポスター展示スピーチ

12：30～13：40 昼食 および博物館見学

（13：10より学芸員による解説）

13：40～14：40 作品・ポスター展示の説明・質疑（展示会場にて）

※作品・ポスター展示時間

5/25-13：30～5/26-14：40

※作品・ポスター展示ショートスピーチを研究発表会場で行います。詳細は送付します。

2. 参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5/26）		1,050円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締め切り日 2013年3月27日（水）

①既にお送りした「発表者へのお知らせ」（2種）に沿って、第14回総会・大会実行委員 能澤慧子までEメールにてお申し込み下さい。（必着）

②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・作品展示の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、発表者は共同発表者とも本会会員に限られていますので、非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願い致します。

（2）要旨原稿締め切り日 2013年5月1日（水）

（提出先：nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp）

- ①用紙：A 4縦置き、横書、1枚
- ②余白：上25mm、下30mm、左右30mm
- ③文字：10.5ポイント、明朝体

(3) 参加申込・払込締め切り日

2013年5月1日(水)

ゆうちょ銀行口座：渋谷松濤支店 (019)

口座番号0548708

加入者名：能澤慧子(ノウザワケイコ)

4. 特別講演について

◆講師 大角幸枝氏

(金工作家日本工芸会正会員東京家政大学名誉教授)

◆講演内容

東京都台東区は、昔から様々な生活用品の製造業が盛んな地域でした。それらは小間物屋と呼ばれ、袋物、鞆、靴、帽子、櫛簪、化粧品、装身具、飾り紐など、実に多彩な品目の日用品を製造して販売する店が軒を連ねていました。その歴史は今も受け継がれ多くの職種がこの地に息づいています。中でもファッションに敏感な化粧品であるアクセサリ製造業に携わった経験から、現代に生きる装身具の歴史と現状をご紹介します。

◆講師のプロフィール

- 1945年 静岡県掛川市に生まれる
- 1969年 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
- 1976年 第23回日本伝統工芸展初入選以後連続出品 86年奨励賞 87年総裁賞受賞
- 1990年 第37回日本伝統工芸展鑑査委員
- 1991年 第1回香取正彦賞
第4回岡田茂吉賞展優秀賞受賞
- 2009年 第56回日本伝統工芸展保持者賞受賞
- 2010年 紫綬褒章受章、第17回岡田茂吉賞展
MOA美術館賞受賞

国内外にて個展企画展、国際展に招待出品多数。文化庁、東京国立近代美術館、MOA美術館、英国王立ヴィクトリア&アルバート博物館、王立スコットランド博物館他に作品収蔵

5. 見学会 東京家政大学博物館展示内容

◆企画展

「よそおう

—江戸後期から昭和初期のきものを中心に—

「よそおう」。それはいつの時代も、男女ともに心が躍ることではないでしょうか。本展では、江戸後期から昭和初期のきものを中心に、櫛や簪、化粧道具、錦絵などをご紹介します。階層別に好まれた表向きの様式だけではなく、下着や羽裏などの見えないところや意識しないと気がつかないこだわりなど、当時のおしゃれどころに触れます。

また、同窓会への呼びかけにより、数多くご寄贈いただいた銘仙。日常着として明治から昭和にかけて大流行した華やかなデザインが展示室を彩ります。

◆常設展 裁縫雛形・レースに関する展示

◆博物館の開館時間

5月25日(土) 9:30~17:00

5月26日(日) 9:30~15:00

開館時間中、自由に御見学下さい。

6. アクセス

- ① JR埼京線 十条駅下車徒歩5分
- ② 都営三田線 新板橋駅徒歩15分

7. 連絡先

服飾文化学会 第14回総会・大会実行委員長

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

東京家政大学 服装史研究室

Tel.&Fax: 03-3961-8273

担当：能澤 慧子

(nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp)

8. その他

- ① 展示会場は土足厳禁のためスリッパをご用意します。スリッパでない方がよろしい方は、上履きをご持参下さいますようお願いいたします。
- ② 展示作品の撮影：カメラマンによる撮影を1作品につき1点、展示終了後に行います。

博士論文「中世後期の香文化」概要

本間洋子

香道は、香木を焼きその香りを鑑賞する我が国独自の芸道である。しかし、その研究については実証的な歴史研究は皆無と言ってよい。中古以来、薫物（各種の香木香料を練り合わせた練香）は存在していたが、香木一木の香りを嗅ぎ分ける香道の発生は中世後期となる。ところが、この時期に関しては、近世に作られた香道流派の「伝書」によって概説的に説かれるのみで当該期の一次史料を用いて検討した研究はなかった。香道が文化史の中でも特殊な分野として小さな位置しか与えられていない現状はこうした事情による。

そこで、本研究では香（こう）を焼き鑑賞する催しである香会と香木・薫物の贈答を香文化として捉え、香道の発生期の一次史料を基に、Ⅰ概説で「香道の祖」とされる三條西実隆及び実隆に師事したとされる「香道志野流の祖」志野宗信と香との関係の再検討、Ⅱ香の文化が禁中を中心に展開することから、そこでの「香会」ではどのような方法が用いられていたのか、具体的内容についての考察、Ⅲ天皇に対しては多方面から香木の献上が行われ、他方天皇からは自ら調合した薫物や匂い袋の下賜がみられ、これらを数量的かつ具体的に考察し、その意味を問う。以上の三つの角度から中世後期の香文化を研究したものである。

Ⅰは検討の結果、三條西実隆には「祖」とされる事跡はみられず、むしろ三條西家における香会の実質的主導者は連歌師宗祇であり、また三條西家の宗家である転法輪（てほり）三條家が古來からの「薫物調合の家」であったことが指摘できる。それが、近世期になり、文化人として名を残した三條西実隆に両者の功績が収斂した結果が「香道の祖」とされたことと結論付けた。

一方、志野宗信及び息宗温については、応仁の乱後の京都の酒屋土倉史料に二人に適合すると思われる人物が確認できた。ただし、宗信の場合も左右競合の物合である「名香合めいこうあわせ」を主催した記録が残るが、そこに指導的行為はみられない。実隆と宗信との交流を裏付ける一次史料はなく、両者が「祖」となったのは、この「名

香合」記録が後に香道伝書へ収録され、「名香合」を実隆が指導し実践したとの解説が付されたことがもととなったと考えられる。

Ⅱは後土御門天皇期から靈元天皇期までの禁中の香会では、有試十炷香を中心に、新たな系図香という「組香（複数の香木を組合せて構成し香りの違いを当てる）」が行われており、その具体的な実践方法を明らかにした。また、近世前期に成立したとされてきた著名な組香「源氏香」の原型が、既に百年以上前の永正年間に、当時の武家側の権力者細川高国と関白近衛尚通によって生まれていたことを発見した。

Ⅲ東南アジア原産である香木の献上については、中世後期には琉球を中継した貿易により我が国にもたらされていたため、貿易に関与していた大内氏や島津氏等の西国大名からの件数が多い。その後、朱印船貿易により産出国との直接交易が行われたが、鎖国は徳川幕府の貿易統制を目的としたとされる通り、鎖国後は香木を含め徳川氏が貿易を独占していたことが献上記事からも明確となる。また、概説では既に廃れたとされていた薫物は、実際には天皇により勅合され下賜されており、正親町天皇期・後陽成天皇期に際立って増加している。新興勢力の権力や朝廷への経済的援助に対し、天皇は王朝文化を継承する薫物を贈った。それは織田信長入京後に始まるが、そこには下賜する側とされる側の意向の一致もみられる。

東大寺正倉院蔵の名香蘭奢待については、室町将軍や信長が切り取ったことが知られるが、その蘭奢待はさらに東大寺公惠僧正や後土御門天皇、畠山義総、山科家、徳川家康他に献上・下賜されている点を指摘した。

付論として、香道の発生期における香炉や灰、火道具等を史料から復元をした。当時の道具のみでも十分に香会を行うことができ、後に道具類の増加により各流派の作法や流儀が生まれたと考えられる。

以上、中世後期の香文化を一次史料より考察した。（武蔵大学総合研究所研究員）

2012 (平成24) 年度 論文発表会の報告



論文発表会会場

本年度の論文発表会は2013年3月7日(木) 13:30より文化学園大学(旧文化女子大学) C051番教室において開催された。参加は102名で盛会となった。

卒業論文は7件、修士論文は2件、うち実物製作3件を伴う発表であった。

<プログラム>

開会の辞 会長：岡田 宣世(女子美術大学)

卒業論文

座長：徳井淑子(お茶の水女子大学)

1. 『風俗画報』にみる明治期の子ども服の服装
—洋装化の浸透を男女間で比較する—
上津香澄(日本女子大学)
2. ファッションブランド She'll の設立に向けた研究と制作 —「いき」の創造と消費者との「つながり」を重視したビジネス—
田上亜友美・村上裕香・市野佐朋・中山知愛子(京都女子大学)

座長：常見美紀子(京都女子大学)

3. セクシュアル・マイノリティとファッション
宮崎 力人(杉野服飾大学)
4. セーラー服研究
上野 邦子(文化学園大学)

座長：深津裕子(多摩美術大学)

5. トルコ・タイルの装飾文様からのデザイン発想
—実物製作— 栗生紗希(文化学園大学)

座長：大網美代子(大妻女子大学)

6. 和歌からの洋服のデザイン発想
—草木染を用いた実物製作—

篠原由佳(文化学園大学)

座長：知野恵子(東京家政大学)

7. Vivienne Westwoodのジャケットのパターン分析
—実物製作— 三重野咲季(文化学園大学)

修士論文

座長：佐藤泰子

8. 明治時代におけるきもの雛形本の実態
—発生と衰退の背景—
桜木英里子(共立女子大学 大学院)

座長：塚田耕一(杉野服飾大学)

9. 1980年代初期日本における黒の流行について
小川裕子(日本女子大学 大学院)

閉会の辞 副会長：長田 美智子(鎌倉女子大学)

上津論文は『風俗画報』掲載のイラストから子どもを描いた1143点を抽出分析。女兒はバラ柄の着物、洋風髪飾り等、今までの衣服が新しい生活スタイルや文化に合わせて変化。男児は大人のミニチュアとして洋服=公、和服=私的な衣服と捉えた。男女間の洋装化の浸透を和服・帽子・洋服別に比較した。

田上・村上・市野・中山による論文は「shell(貝)」

・「she will」を基に「彼女」を新たな世界に導くファッションブランド「She'll」の設立に向けた研究と制作である。自立した女性像の提案から「いき」の美意識の表現を試み、ブランドと消費者との「つながり」を重視したビジネスの展開を考察した。

宮崎論文はセクシュアル・マイノリティとファッションの関係に着目し、身体的性・性自認・性的指向の3要素とそれらの社会背景を探った。性の捉え方とファッションの影響を提示した研究であった。

上野論文はモードとしてのセーラー服を探究し、海軍水兵服・女学生の運動服、海外での形成を辿り、皇室の装いやコレクションを発表。「セーラー服＝女子学生」イメージ脱却とプロモーションを提言した。

粟生論文はトルコ・タイルを132点抽出し、その装飾文様の特徴を調査分析。そこからデザイン発想したワンピースドレス作品7点を挙げ、オリジナルテキスタイルを用いて実物製作を行った。

篠原論文は和歌の持つ意味をデザインソースとし、草木染による色彩表現により和から洋への新しい発想の転換を試み、「古今和歌集」より選出した和歌から春・秋のドレスを製作。事前に商品・コレクション調査、事後に官能検査を実施して評価を得た。

三重野論文はVivienne Westwoodの1986年から2012年計361体のジャケット作品を分析し、実物5着からパターン採取して、解体による縫製調査を行い再現。体を引き立たせることに焦点を当

てた、見られることを楽しむための服である特徴を明示した。

桜木論文は江戸時代の小袖雛形本と明治時代におけるきもの雛形本の発生と衰退を比較し、きもの雛形本の実物調査から分類して①呉服制作②化学染料を用いた新技術の普及③図案考案の活発化④江戸時代の模様の見直し、と異なる刊行目的を考察した。

小川論文は1980年代初期日本における黒の流行について、従来の主観的・懐古的・神話的な言説に対して学術的な検証を試みた。「黒の衝撃」はコムデギャルソン、ワイズの新たな美的感覚で、日本の黒の流行は黒の再認識である実態を明らかにした。

各発表に対して予定時間を超える活発な質疑応答や講評が行われた。発表を通して、大学間の垣根を越えた交流を持つことができ、岡田宣世会長が開会挨拶で述べられた「学びの場」となったようである。最後に、長田美智子副会長の総評では多岐にわたる充実した内容と杉野服飾大学の学生達の熱心な姿勢が評価された。発表後に展示した実物製作を見学された先生方も多く、有意義な論文発表会となった。

懇親会は学生食堂にて、塚田耕一先生の司会で始まり、昨年度論文発表会担当の荻原延元先生の乾杯のもと、発表者と教員、多くの学生との楽しい交流会となった。17:50に岡田宣世会長の閉会の辞と共に、散会となった。

(論文発表会担当 福田博美)



裏勝りの「いき」を表現した作品を着装して発表



熱心に質問をする杉野服飾大学の学生

2012 (平成24) 年度 研究例の報告

平成24年度研究例会は10月27日、東京都千代田区の共立女子大学で開催された。ミニ・シンポジウム「歌麿美人：歌麿の美人画に見られるファッション」と題して、3名の研究者によるご講演が行われ、その後出席者を交えたディスカッションが行われた。出席は学会員30名、非学会員5名。講演内容は次の通りです。

「喜多川歌麿の美人画」

田沢裕賀 (東京国立博物館 絵画・彫刻室長)

本発表では、喜多川歌麿の描いた作品を、服飾資料として考察するための前提として、絵画史の立場から、歌麿の生涯と作品の変遷に関する基本情報を整理し提示した。

近代以降の画家と違い、浮世絵師に関してはその素性伝歴に関する記述は極めて少ない。これは鈴木春信などにも言えることだが、歌麿に関しても出身地・生年が確定しているわけではない。歌麿が活躍していた時期の式亭三馬『裨史億説年代記』・「倭画巧名尽」(享和2年・1802)では、歌麿は東洲斎写楽や葛飾北斎と同様に流派に属さない絵師として扱われている。少年期には町狩野派の鳥山石燕に学んで俳諧関係の書物に挿絵を描いていることが確認され、宝暦中期(1755~58)の生まれと推測される。この時期を第一期とすると、主に版本挿絵を描いており、画風も後の美人画家のイメージとは異なる画風確立前の段階といえる。

「歌麿」の号を用いた天明元年(1781)以降、確かな作品の確認が出来ない寛政3年(1791)頃までを第二期とする。この時期の作品のほとんどは、蔦屋重三郎を版元として出版されており、自身も筆綾丸の狂歌名で狂歌を詠んでいるように、蔦屋を含んだ天明狂歌壇との結びつきが強かった。作風にも北尾派の影響が見られ、環境描写をともなった背景に美人が描かれるスタイルの作品を狂歌本や一枚摺の錦絵で描いている。燈籠鬢など時代の風俗が良く反映された作品が制作された。

寛政5年から翌年にかけて、「歌撰恋之部」等の代表作とされるシリーズが蔦屋から出版される。この時期が歌麿の絶頂期であり、女性の外面の美しさだけでなく、内面の微妙な心理の描写に特徴を見せる作品を描いている。顔の輪郭線を描かない「娘日時計」シリーズや、髪の毛や染織品などの衣装を高度な彫摺技術によって表現しようと



講演風景 田沢裕賀氏

する意欲的な試みがなされた寛政8年頃までを第三期とする。この時期の画業を特徴付けるものとして美人大首絵の創始が上げられる。また化粧姿を描いた作品もあり、女性の表情や化粧・服飾に対する歌麿の関心の高さが確認される。

寛政末から没する文化3年(1806)までの第四期の作品では、描かれた女性の内面から醸されるような歌麿独特の色気が失せて、画風には硬化が見られる。文化元年の筆禍事件により手鎖の刑を受けるなど、制作意欲の減退も感じられる。

歌麿の表現意識を作品を通じた画風展開とともに考察した。

歌麿美人の化粧・髪型・装身具

村田孝子

1. 天明から寛政期にかけての化粧について

江戸時代の化粧は、今とは違ってシンプルであったが、その人の顔を見れば、どのような身分、階級、または職業や未婚、既婚なども分かったのである。また、色について見てみると、紅の赤、白粉の白、今では見られなくなったお歯黒、眉作り・眉剃りといった黒の三色が主流であった。

紅化粧口紅に使われた紅は、主に紅花から作られたもの。色は赤一色で、濃いか薄いかわかったが、浮世絵には、その色合いははっきり出ている。ただ、紅化粧は一般的に大きな流行が起きる



講演風景 村田孝子氏

のが、文化、文政頃で、遊女などは紅を濃くつけていたが、一般庶民はうすうすつけていたと思われる。その理由として、紅花から口紅として採れる紅の量は0.1～0.3%と少なく、大変高価で、紅一匁・金一匁と言われるほどであった。歌麿の浮世絵で、紅化粧と関連あるものをみると、容器としては、紅猪口が主流だったかもしれない。はっきりと分かるのは寛政7年「高島おひさ」の黒い鏡台の上の紅猪口である。

白粉化粧は化粧の中で、中心となっていたもので、「色の白いは七難隠す」という諺のように、色白は美人の第一条件でもあった。当時の白粉には、鉛白粉と水銀白粉があったが、主に鉛白粉を使用。色は白一色である。白粉は水に溶いて顔や首、襟や胸の辺りまで塗った。歌麿も、白粉化粧の美しさを十分に理解していたのだろう、寛政7～8年頃の「襟粧い」には、白粉化粧の美しさを表す富士額と、「燕の尾」のように長く伸びた襟足の美しいを描いている。

お歯黒・眉作り・眉剃りは江戸時代の女性の結婚や出産という、いわば通過儀礼に関わっていた。結婚が決まると歯を黒く染めた。黒は他の色に染まらないところから、貞女のしるしとも言われた。

江戸時代の眉作りは、上流階級の女性（公家・武家）が行なった。（男性は公家階級のみ）。武家階級の女性は、儀式などの時に、額の上部に眉を描いたが、一方庶民は、子供が生れると眉を剃ったままで、別の眉は描かない。

2. 髪型・髪飾りについて

歌麿が描いた浮世絵の殆どが燈籠髷であるが、既に安永頃から流行していた。未婚女性の島田髷、既婚女性のしの字髷、遊女の横兵庫と貝髷と

いったように未婚、既婚、職業などで髪型が分かれていた。また、流行していた髪飾りは斑なしの鼈甲の櫛・簪が多く、遊女の憧れの髪飾りでもあった。また、興味深いのはびらびら簪の登場と流行であろう。

3. 装身具について

江戸時代にはあまり行われていないと思っていた装身具は、歌麿の浮世絵から面白い発見がある。手首の紙繕りと、指の輪であろう。紙繕りについては、「教訓親の目鑑正直者」を参照。指の輪については、洒落本の『戯言浮世瓢箪』『白狐通』に書かれている。

歌麿美人画に見られる服飾

共立女子大学 長崎巖



講演風景 長崎巖氏

喜多川歌麿（宝暦3<1753>年～文化3<1806>年）は、鈴木春信によって錦絵が大成されて以降の代表的な浮世絵師のひとりで、寛政3年女性美の理想的表現法、美人大首絵を発表し、世人の注目を集めた。肉筆画・春画にもすぐれたが、女性の表情を豊かに捉えた画風、繊細な服飾表現により、寛政期、鳥居清長と並ぶ美人画の第一人者となった。

本発表は、歌麿の美人画に見られる服飾表現がいかに現実に即したものであり、また精細にそれを表現したものであるかを、歌麿の作品と現存する小袖や単衣、帯などの現存服飾品とを対比させながら述べたものである。

江戸時代中期から後期にかけての代表的な町人女性の小袖様式は、模様を小袖の後身頃の裾から前身頃と衽の裾にかけて連続的に表した「裾模様」と、前身において模様を「裾模様」よりも高

い位置まで配する「裒模様」が流行する一方、模様を小袖全体に配置する総模様も用いられていた。また主に縮緬地に友禅染で表わされたこれらの様式に対して、庶民的な階層が普段着として用いていたのは縞や格子の紬や木綿の小袖であった。

歌麿の美人画にはこうした当時の流行様式が克明に描かれており、女性の個性を表現する以上の熱意をもって服飾表現が行われている。それは夏の衣裳においては生地質感表現という点においても顕著に認められる。麻で仕立てられた「帷子」と絹で仕立てられた「単衣」との透け感の違いの表現などは、その典型的な事例である。また同じく夏衣裳にしばしば用いられた麻緋の帷子や浴衣の表現も実にリアルである。

また同じ型染めでも、女性の衣服ではほとんどが絹地に施された「小紋」と、一方ほとんどが木綿地に施された「中形」の着物を、歌麿は浮世絵の中でも技法と生地質感をたがえることなく正確に表現している。

更に着姿(着用姿)の描写においても、歌麿は当時の一般的なあり方を忠実に描いている。例えば、小袖の下に二枚重ねの「下着」、さらにその下に襦袢を着用するという当時の着姿の常識を忠実に再現し、特に当時流行の「対の下着」も忠実に再現している。

こうした細心の表現は、小袖にとどまらず、帯の描写においても、当時町人女性の間で人気のあった輸入品のビロードの帯や更紗の帯、名物裂を用いて仕立てた帯などもしばしば描かれている。

また歌麿の服飾表現の中には、同じ衣服模様の使い回しの事例も見られることも、注目される。多くの作品を描く中で、時にはそうした省略的な仕事もしていたのである。

夏期セミナーのお知らせ

2013年度夏期セミナーは、8月7日(水)～9日(金)に京都市内において、日本刺繍・染織・蒔絵等の研修を計画しています。定員30名の子定。

宿泊ホテルとして懇親会会場及び近接のホテルに30室以上を確保しています。

***** 展覧会のご案内 *****

フランス国立クリュニー中世美術館所蔵
「貴婦人と一角獣」展
6枚連作の有名なタピスリーが来ます。

2013年4月24日(水)～7月15日(月)
10:00～18:00(金曜日は～20:00)
国立新美術館(東京・六本木)
2013年7月27日(土)～10月20日(日)
国立国際美術館(大阪・中之島)
観覧料:一般1500円(前売り1300円)
大学生1200円(前売り1000円)

***** 事務局より *****

☆新入会員(敬省略・五十音順)
(2012年9月1日～2013年2月15日)
正会員
北 島 恭 代(共立女子大学)
小 林 桂 子
鳥 山 寛 恵(杉野学園衣裳博物館)
中 村 弥 生(共立女子短期大学)
学生会員
尾 上 望(京都女子大学大学院)

***** お知らせ *****

●平成25年度会費のお振込をよろしくお願ひします。振込先:郵便振替口座00150-7-184189服飾文化学会(会費:正会員6000円、学生会員3000円)

会報 No.24:2013(平成25)年3月29日発行
編集発行人:服飾文化学会
事務局:112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学 人間生活学科 徳井研究室
TEL/FAX:03-5978-5802
E-mail:tokui.yoshiko@ocha.ac.jp
URL:http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp